

## 研究ノート

# 幼児に見られる攻撃的笑いについて

## — 観察記録からの検討 —

伊藤 理 絵  
内藤 俊 史  
本多 薫

### 要旨

本研究の目的は、幼児期に見られる攻撃的笑いについて、観察記録に基づき検討することである。年少児～年長児44名について分析したところ、幼児は、直接的に相手を支配・威圧したり、間接的に攻撃するために攻撃行動に伴う笑いを見せていた。また、仲間と共有する攻撃的笑いには、一つの笑いに親和的性質と攻撃的性質が含まれており、より見えにくい形の攻撃的笑いが見られた。

### 1. はじめに

幼児はよく笑う。ノンバーバル・コミュニケーションの手段として用いられる笑顔は、①「戦わない」「敵意を持っていない」ということを示すサイン、②「癒し」の効果、③「感謝」の意味を伝える、④「承諾」や「許可」などの意味、⑤相手の怒りを抑制する効果、という意味を持っており（井上, 2004）、幼児の笑いは基本的に人への親しみから発せられるものである（平井・山

田, 1989）。

一方で、乳児が養育者とのやり取りを通して発達させていく笑いは、次第に他者へも向けられるようになっていくにつれ、親しみだけでなく、攻撃的意味も持ち合わせるようになってくる。つまり、コミュニケーションとしての笑いには、人と仲良くなるための手段を意味する、笑うことで互いの緊張を解き、笑いを共有しあうことで親密感を深めるような相手への「親和」を表す“「協調」としての笑い”と、笑った方が勝利を手にすることで優越感に浸り、笑われた方が敗者となってみじめな思いをしなければならない、という笑いの人を攻撃する性質を利用した“「攻撃」としての笑い”があるのである（井上, 1984）。

しかし、幼児期における攻撃的笑いについては、これまで十分に検討されてこなかった。それは、幼児の笑いに関しては、友だちや保育者に悪口を言ったり、相手が嫌がることをするような幼児でも、そのからかい行動に悪意は存在せず、むしろ、親し

## 笑い学研究16 (2009. 7)

い者に対して、あるいは、親しくなりたいと望む相手に対して行うことが多い(平井・山田, 1989)からであると思われる。しかし、攻撃的笑いの一種である嘲笑の出現について、友定(1993)は、3歳児(年少児: 4月時点で3歳)になると集団の規範からのずれを理解し、笑われることを気にし始め、4歳児(年中児: 4月時点で4歳)ではその笑いを他者へも向けるようになり、人を笑う、自分よりも劣ったものを笑うという嘲笑行為が出てくる。そして、5歳児(年長児: 4月時点で5歳)の終わり頃になると、「笑ってはいけない」と自らコントロールするようになる、としている。よって、年少児～年長児における幼児の笑いを分析することで、幼児の攻撃的笑いの実際を知ることができるのではないかとと思われる。また、攻撃の意図を明確にするために、攻撃行動とともに笑いを調べることで、幼児に多いとされてきた親和的笑いとは質的に異なる笑いを収集できるのではないかと考えられる。

したがって、本研究では、幼児の攻撃行動に伴う笑いを攻撃的笑いとし、幼児に見られる攻撃的笑いについて明らかにすることを目的とする。攻撃行動や攻撃的笑いについて、こちらから意図的に見せたり、実験したりすることは倫理上の問題があるため、自然発生的に生じる攻撃行動や攻撃的笑いを観察を通して検討する。

## 2. 方法

年少児～年長児44名(年少児7名, 年中児17名, 年長児20名)を対象とし、予備観

察を4回行った後、1ヶ月にわたって本観察を5回実施した。観察時間は、30.6時間(年少児3.3時間, 年中児8.9時間, 年長児18.4時間)であった。

観察方法は、観察標的児1名を一定時間(約15～20分間)観察し、攻撃行動について、時間軸に沿って、攻撃行動が起こった前後の文脈、相手の反応や周囲の反応、それを受けての行為者のその後の行動について、具体的に記述していった。観察の際は、なるべく普段の保育の文脈を壊さないようにすることに努め、こちらから積極的に話しかけたり遊びに参加したりはせず、子どもに話しかけられた時と、子どもが危険に直面した時にだけ介入する立場をとった。

攻撃的笑いについて分析するため、攻撃行動に伴う笑いの有無も記録した。

攻撃行動の分類は、畠山・山崎(2002)に従い、①直接的・道具的攻撃(欲しい物を手に入れるため、また、自己主張する場合に用いられる身体的・言語的攻撃)、②直接的・脅し攻撃(仲間を支配したり威圧したりするために用いられる、身体的・言語的攻撃)、③関係性攻撃(相手との関係を絶つため、間接的な方法(無視等)を用いて相手を傷つける)とした。事例数は、攻撃行動の発生から停止・消失までを行為者につき1事例とし、観察者と評定者1名により分類した。

## 3. 結果

直接的・道具的攻撃、直接的・脅し攻撃および関係性攻撃について、笑いの有無に従い分類し、攻撃総数における割合を算出

## 笑い学研究16 (2009.7)

した(Table 1)。直接的-道具的攻撃に伴う笑いは見られず、直接的-脅し攻撃、および関係性攻撃において笑いが見られた。直接的-脅し攻撃よりも関係性攻撃に伴う笑いが多く見られたが、全体として、攻撃的笑いが発生したのは、攻撃行動の9.68%だった。

攻撃的笑いの各事例を分析した結果、直接的-脅し攻撃に伴う笑いは、劣勢の相手を仲間と笑い合う(2名)、自分の攻撃行動を肯定するために笑う(1名)場合に、関係性攻撃に伴う笑いは、相手の劣った行動を仲間と笑い合う(2名)、相手の悪口を言い仲間と笑い合う(2名)、仲間に相手の排除を笑って求める(1名)、少数派を陰で笑う(1名)場合に認められた。直接的-脅し攻撃における攻撃的笑いのうち、劣勢の相手を仲間と笑い合う事例では、笑われた幼児が保育士に助けを求め、保育士の介入により攻撃行動が制止され、その後、笑った側と笑われた側の幼児が一緒に遊んでいた。また、関係性攻撃において、相手の悪口を言い仲間と笑い合う事例は、5名の幼児が同意のもとで特定の相手(1名)を無視する状況の中で見られた。

## 4. 考察

本研究の目的は、幼児期における攻撃的

笑いを明らかにするため、幼児の自然発生的な攻撃行動と笑いについて観察に基づいて検討することであった。

直接的-道具的攻撃において笑いが見られないのは、幼児が物や場所を獲得したり、自己主張する場合において笑う場合は、相手へ親和性を示すことになるためであると考えられる。例えば、「貸して。」「お願い。」という言葉で笑顔を伴うことで示すことで、物や場所の獲得や自己主張場面が友好的に処理されるなど、攻撃性を表さない手段として笑いが用いられていることが示唆される。

直接的-脅し攻撃および関係性攻撃において笑いが見られることから、幼児が攻撃的笑いをする場合、相手を支配・威圧したり、間接的に相手を攻撃するために笑いをういていると言える。具体的には、自分の攻撃行動を肯定したり、優越感を誇示するために笑いが見られたことから、笑いにより、自分の優位性や正当性を示していると考えられる。また、関係性攻撃に伴う笑が多いことから、攻撃的笑いは見えにくい形で発生することが分かった。攻撃行動における笑いの割合が9.68%であることから、攻撃的笑いは、頻度においても、形態においても、“見えにくい”ということが言える。

Table 1 攻撃行動と笑い(発生数)

	笑 い		計
	有	無	
直接的-道具的攻撃	0(0.00%)	37(39.78%)	37(39.78%)
直接的-脅し攻撃	3(3.23%)	40(43.01%)	43(46.24%)
関係性攻撃	6(6.45%)	7(7.53%)	13(13.98%)
合 計	9(9.68%)	84(90.32%)	93(100.00%)

さらに、個人による攻撃的笑いは、笑う相手を劣勢に立たせ、自分が優位になる性質のみを表しているが、仲間と攻撃的笑いを共有する場合は、仲間とは親密性を表す一方で、笑いの相手には攻撃性を示しており、一つの笑いに、親和性と攻撃性という笑いの2つの性質が含まれる構造となっていた(Figure 1～2)。この笑いは、行動としては、仲間と仲良く笑っているように見えるため、笑い発生の文脈を知らない第三者には攻撃的笑いだと気づかれにくい笑いである。

攻撃的笑いが、即いじめにつながることは考えにくい、いじめは見えにくい性質を持っており、発見するのが難しく、その理由の一つに加害者と被害者の「意識のずれ」が挙げられている(伊藤, 1998)。劣勢の相手を仲間と笑い合ったり、仲間と悪口を言って笑い合っていた事例があったが、笑われた幼児や自分が笑われていると気づいた

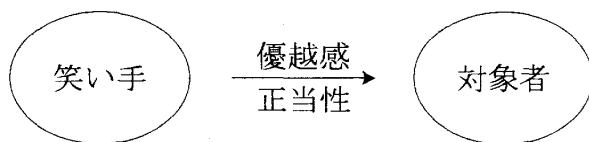


Figure1 単独での攻撃的笑い

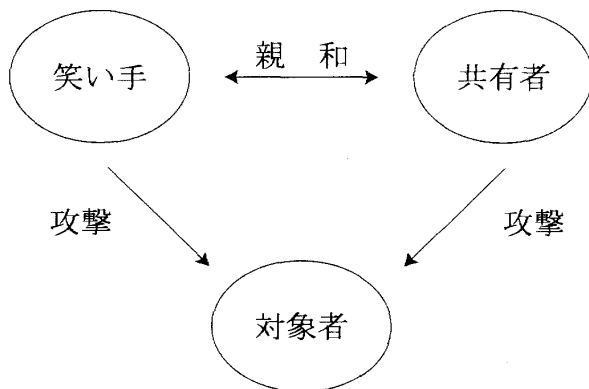


Figure2 仲間との攻撃的笑い

幼児は、保育士に助けを求めたり、悲しそうな表情を見せたりしており、笑った側と笑われた側に意識のずれがある笑いであった。また、劣勢の相手を仲間と笑い合った事例では、助けを求められた保育士の制止により、その後、笑った側と笑われた側の幼児が共に遊んでいたが、悪口を言って笑い合った事例は、複数の幼児(5名)で一人の幼児を無視する状況の中で発生したものであった。幼児期の子どもは、利害の対立を通じて自分と他者との要求の違いを意識し、いさかいを通して、いろいろな解決の方法を具体的に身につけていくため、仲間同士のトラブルの経験は、社会性の発達にとってきわめて重要な意味を持つ(臼井, 2002)一方で、幼児期においても、いじめの3つの要素である加害者の複数性、攻撃・拒否的行動の継続性および被害者の精神的苦痛を満たす行動が見られることから、保育者が子どもの発する微妙なサインに対し、敏感になる必要がある(畠山・山崎, 2003)とされている。

以上のことから、幼児の笑いを理解する際には、親和性と攻撃性の両面から考慮する必要があると言える。

## 5. まとめ

笑いは、人と友好的関係を結ぶ親和的機能があり、幼児においても、人への親しみを表す笑いが多く見受けられる。しかし、本研究では、幼児に見られる攻撃行動に伴う笑いを攻撃的笑いとし、幼児期における攻撃的笑いについて見てきた。幼児は、相手を支配、威圧するため、または間接的に

## 笑い学研究16 (2009.7)

攻撃するために笑いを笑い、笑うことで攻撃行動を誇示したり、優越性を表していた。また、仲間と共有された攻撃的笑いには、仲間同士では親和的笑いを示し、笑いの対象者には攻撃性を表すというように、一つの笑いに笑いの2つの性質が含まれていた。よって、幼児の笑いの全てを親和的と見なすのではなく、発生した文脈を適切に判断することが重要であることが示された。

今後は、幼児の攻撃的笑いの発達的变化、および性差について、検討を行いたいと考えている。

(いとう りえ・ないとう たかし・  
ほんだ かおる)

## 文 献

- 畠山美穂, 山崎晃(2002). 自由遊び場面における幼児の攻撃行動の観察研究: 攻撃のタイプと性・仲間グループ内地位との関連. 発達心理学研究, 第13巻, 第3号, 252-260.
- 畠山美穂, 山崎晃(2003). 幼児の攻撃・拒否的行動と保育者の対応に関する研究: 参与観察を通して得られたいじめの実態. 発達心理学研究, 第14巻, 第3号, 284-293.
- 平井信義, 山田まり子(1989). 子どものユーモア おどけ・ふざけの心理. 大阪: 創元社.
- 井上宏(1984). 笑いの人間関係. 東京: 講談社.
- 井上宏(2004). 笑い学のすすめ. 京都: 世界思想社.
- 伊藤美奈子(1998). 不適応行動の諸相. 無藤隆(編著). 児童心理学. 124-133. 東京: 放送大学教育振興会.
- 友定啓子(1993). 幼児の笑いと言達. 東京: 勁

草書房.

- 臼井博(2002). 人との関わりの生涯発達. 内田伸子(編著). 発達心理学. 116-132. 東京: 放送大学教育振興会.

## プロフィール

伊藤 理絵

山形大学大学院社会文化システム研究科。幼児における笑いの二面性（親和的笑いと言撃的笑い）への認知過程に関心を持っている。

内藤 俊史

お茶の水女子大学。

本多 薫

山形大学人文学部。